

東海の古代

第251号 2021年7月

会長 : 竹内 強
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

高良山の神籠石

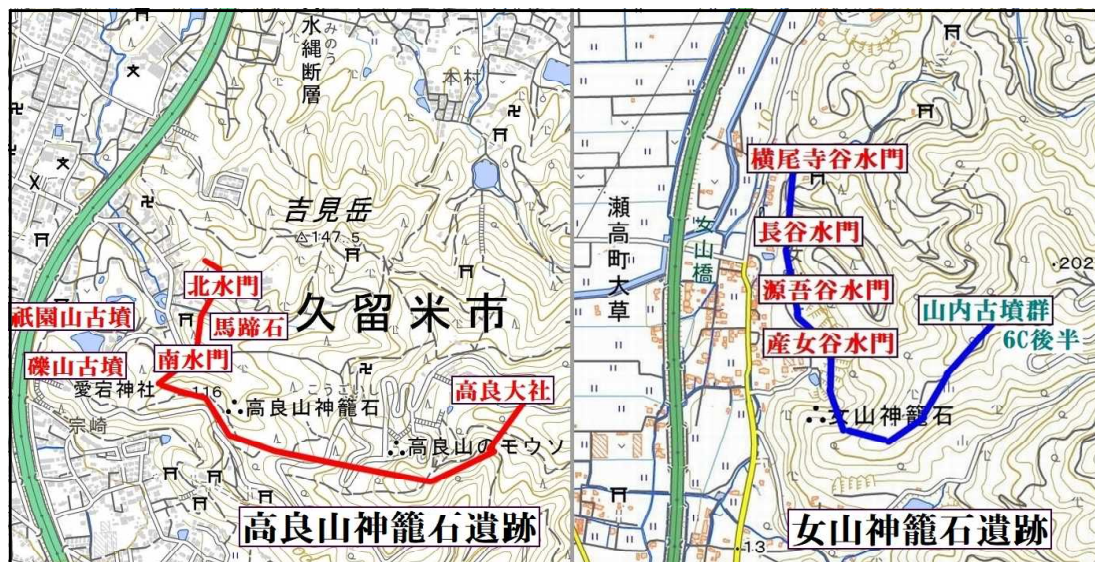
一宮市 畑田 寿一

高良山の神籠石は、明治31年に小林庄次郎が高良山の遺跡を学会に発表するときに、誤って列石線を「神籠石」と紹介したことに始まる。「神籠石」は参道沿いにある「馬蹄石」と呼ばれている磐座の名称で、列石線は蓮の葉に見立てた「八葉の石畳」と呼ばれていた。しかし、明治以降の廃仏毀釈により、由緒あるものを仏に由来するとするよりも神に由来するとした方が良いとする思惑が働き、わざと間違えたとする説も存在し、真偽の程は不明である。

その後、磐境説と山城説とする論争が起こり、現在では山城説に落ち着いている。筆者は本年3月に「古代山城と神籠石」を本誌に投稿して、「**神籠石遺跡の構築は白村江の戦い以前である。**」としているが、今一度、神護石にまつわる歴史を辿ってみたい。

1 高良山の地形

4世紀頃の筑後川は、未だ筑後平野の堆積が進んでいなくて、海が大きく入り込んでおり、高良山の北西部の筑後川付近は海岸であった。筑後平野には沼地が広がり、微高地の甕棺が集中して出土する地は僅かな集落が存在していたと考えられる。高良山は有明海に面する高台で、中国北東部や朝鮮半島からの侵略防御拠点であるとともに、祭祀を行う場所として選ばれていた。



2 高良山の遺跡の変遷

時代	高良大社縁起	遺跡からみる変遷
前 2 世紀	紅桃林遺跡	筑後川流域に弥生集落登場
1 世紀	景行天皇行幸（行宮：高良社）	弥生集落全盛
2 世紀		磐座が造られる。甕棺埋葬
3 世紀	神功皇后高良山に滞在	祇園山古墳構築（中頃）
4 世紀	祇園山古墳	
4 世紀中	玉垂命、高良山に鎮座	神功皇后との関わり？ 横穴式石室
5 世紀	礫山古墳、釜口古墳など造築 社殿の創建（玉垂宮）	礫山古墳など多数造築
6 世紀		社殿の創建？

- ① 筑後川流域に弥生集落が造られ、1 世紀には全盛を迎える。
- ② 他の地方に先駆けて国邑が造られて、朝鮮半島との交流が盛んになる。
- ③ 気候変動により弥生集落は消滅するが、高台の集落は生き残り、朝倉から脊振山麓南部を中心に勢力の集中が興る。邪馬台国の候補地とされている地点にあたる。
- ④ この時期、高良山には磐座など古い形式の信仰がされており、3 世紀中頃には九州最古級の祇園山古墳が造られる。
- ⑤ 4 世紀に入ると前方後円墳、後方墳など古墳の形式も多彩になり、高良山の山麓にも多数の古墳が造られる。

上記の経緯において神籠石で磐境を作るのであれば 3 世紀頃まで遡るが、山城であれば 6 世紀頃まで下っても良い。

4 神籠石の用途

(1) 神籠石は磐境か山城か

題記の疑問は長く論議をされてきたが、現在では山城説で定着している。

決め手となるのは南谷水門付近に防御施設が存在するか否かに係っているが、地元の環有明海歴史考古学研究所の小澤太郎氏は現地調査の結果、「南谷水門は現在は崩れているが、長さ13m、高さ4.5m、基底部幅9.5mあった。北水門と南水門の間は見晴らしがよい場所であり、その地には見張り台を置いたと思われる平地が見受けられる。」としている。広大な神境を石垣で形成する事例は国内には無いことから、山城説が妥当と考えられる。

(2) 縄文時代の列石遺跡

縄文時代には東北を中心にストーンサークルが造られた。ストーンサークルは中央に立石を配置して周囲を列石で囲む形式になっているが、尖石遺跡（長野）では列石は大きく、聖域を表している様にみえる。館石野遺跡（岩手）では環状ではなく、40mに及ぶ列石が発見されており、石を並べることにより、境を表す風習はあった。しかし、山の周囲を囲む列石は縄文遺跡には無いので神籠石が古来の風習に繋がるものとは考え難い。

(3) 朝鮮半島の山城

朝鮮半島は多数の国邑に分かれており、己の地は自分で守る以外に手段は無かった。その為、半島全体では数千の城が存在し、山の地形を利用した城や砦が 3 世紀以降発達した。城の構築目的としては、

- ① 集落の周囲に城壁を設けて全体を守る。
- ② 通常は平地に住み、戦時には山城に籠って戦うための砦。
- ③ 山城は女・子供を匿う場所として、城の外で戦うための避難場所。
- ④ 襲撃を防ぐための見張り台で、通報のための狼煙台の機能も備えた監視所。

ヨーロッパと違う点は、③の存在で、防御機能が脆弱で城と呼べない代物であった。恐らく国邑の規模が小さく、財力的に堅固なものが造れなかったことに由来すると思われる。

国内においても山城の構築目的は一樣では無く、構築箇所も交通の要所にあることから、財力のある土地の豪族が渡来人の技術を使って構築したものとするのが妥当であろう。5、6世紀においては九州王朝の軍事力が弱く、領内に攻め込まれる外部勢力を国が排除できなかった。

(4) 神籠石遺跡の構築時期

2017年に九州国立博物館で「徹底追及！大宰府と古代山城の誕生」と題するシンポジウムが開かれた。この中で、構築時期を斉明天皇期とする通説に対して、土器、土塁の築造方法、切り石などの観点から、7世紀以前の構築と思われるが6世紀を遡らないとしている。しかし、神籠石遺跡を山城と考えて、同じ時期に構築されたとしている点に疑問を感じる。構築の動機は多様で、構築時期ももっと幅があるのではないか。継体天皇や磐井君の時代は既に国家がほぼ整備されており、状況からみて5世紀後半の雄略天皇の出来事と考えた方がよい。

5 まとめ

以上、神籠石が造られたと思われる5、6世紀の北九州の状況を眺めてみた。高良山の山城が他の場所の山城と違う点を挙げると、

①この地は有明海からの外敵に対する防御地点であった。

有明海に面する神籠石の列は見張りを続けるための巡回通路であり、東側には神籠石の列は発見されていない。恐らく最初から無かったのではなかろうか。南方にある女山神籠石遺跡も同様な形式になっており、この2か所が有明海の防衛拠点であった。しかし、九州北部の雷山神籠石遺跡は逃げ城的性格を帯びており、山陰地方には神籠石遺跡は無い。有明海に攻め込む勢力は強力で狂暴であったことを伺わせる。

②高良山全体は古来から聖地であり、磐座を始め時代ごとに種々の形式の墳墓が造られた。

例えば、高良山の南山麓にドーム型の石室を持つ太谷古墳群（6世紀後半）がある。この形の石室は九州独自のものとされているが、奈良の与楽鐘子塚古墳も同様な形式で東漢氏の系列とされており、繋がりと考えられる。

高良山の列状遺構

名古屋市 石田 泉城

1 古代山城について

古代山城は、神籠石系山城や朝鮮式山城に分けられています。

とりわけ、北部九州には、「神籠石」と呼ばれる列石遺構が数多く存在します。

神籠石系山城を個々に比較してみると、福岡兼久留米市にある高良山のように方形に切り出した石をきれいに一段だけ積んで連続されているものと、岡山県総社市の鬼城山きのじょうさんにあ

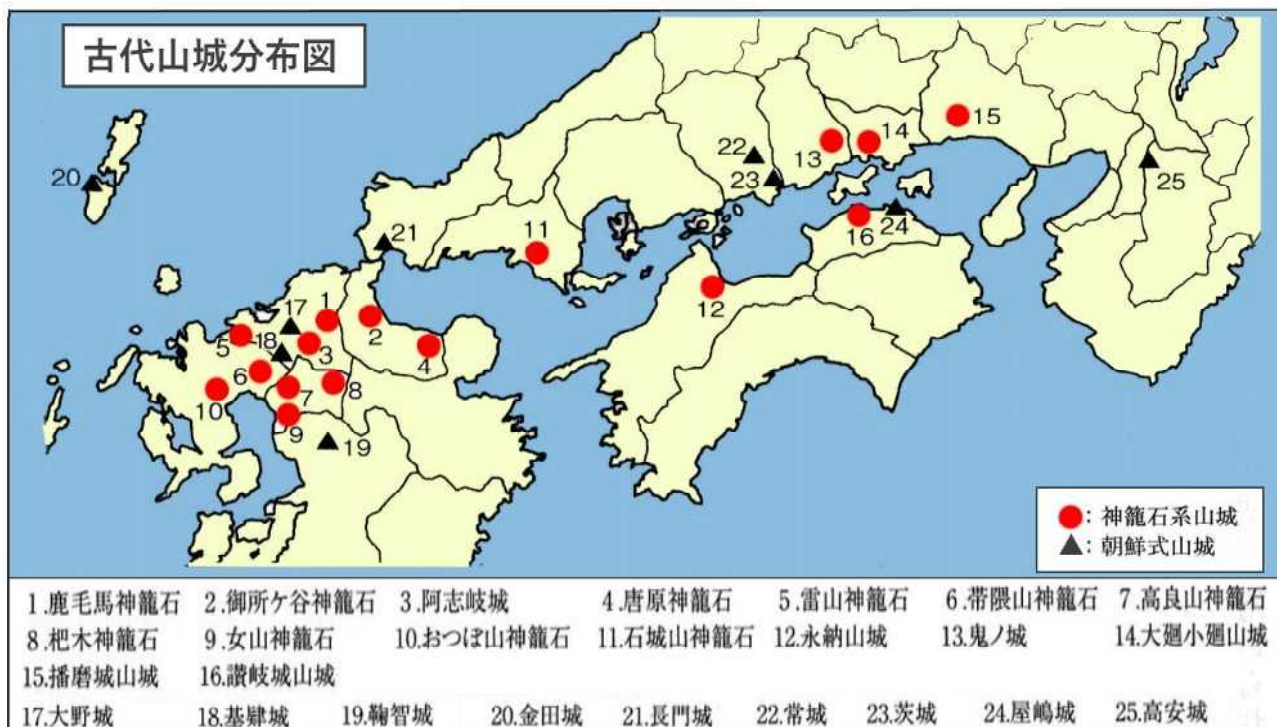
る鬼の城のように角が丸い不揃いの石を使い、背が高い石塁と土塁が混在したものがあり、随分と趣が違います。



また、朝鮮式山城についても、大野城のように山の周囲を環状に取り囲む大規模な城郭でやや粗雑に何段にも積まれた列石遺構と、屋嶋城に代表されるように谷の断崖の切れ目に城壁が築かれ、山を取り巻かない列石遺構があります。

つまり、古代山城には、神籠石系山城にしても朝鮮式山城にしても、その造りは随分違い、一括りにそれぞれの山城に区分するのは、いささか乱暴であるように思われます。

というのも、古代山城の目的が近畿にある都を守るための施設であるとの発想をもとにし、おしなべて同一目的のために造られたと考えられたからではないかと思われます。しかし、もし、これらが近畿の都を守るものとするならば、近畿の都を取り囲むように山城が配置されていなければなりません、実際には北部九州を中心に太宰府を囲むように配置された施設と、瀬戸内海を挟んで両岸に配置されています。



北部九州の山城は、ほとんどが神籠石系山城であり、防衛拠点という側面と逃げ城の側面を持ち合わせているかのようです。

一方、瀬戸内海を挟むように位置している山城は、神籠石系山城と朝鮮式山城が混在しているものの、神籠石系山城に区分されている鬼の城と、朝鮮式山城に区分されている屋

嶋城の立地は、ともに瀬戸内海を見渡す見晴らしの良い場所にあって航行する船を監視する役割に重点が置かれているように思われます。

このように、構造としての区分と、役割としての区分とは異なるようです。

したがって、これらの古代山城のうち、北部九州の「神籠石」は分けて考える必要があり、すべてを同じ目的のために築造されたと理解するのには無理があります。

2 「神籠石」の名称について

高良山の「神籠石」の名称については、江戸時代には『高良山八葉石記』などの文献もあって「八葉石」とも「神籠石」とも呼んでおり交錯していたようですが、高良山の地元の寺小屋であった、門前町府中にある源正寺では、高良山の列石遺構を「蓮華石^{れんげせき}」というように教えており、幕末には、「蓮華石」の呼称が地元で一般的になっていたようです。

このように民衆の間では呼び名が時代によって変わっていました。

文献としては、鎌倉時代後期以前に成立した『高良玉垂宮縁起』に、高良山の列石遺構を「八葉の石畳」とし、神が降臨する磐座を「神籠石」として記されています。

つまり、鎌倉時代後期の1300年初めより以前には、この縁起が存在し、そこには高良山の列石遺構が「八葉の石畳」であるとされているのです。したがって、現存する最も古い文献で確認できる名称は「八葉の石畳」であり、これが適切な名称であると思います。

ところが、小林庄次郎（歴史学者）は、1898年に高良山に訪れたときに列石遺構を縁起に基づいて、本来「八葉の石畳」と呼ばなければならなかったものを「神籠石」と呼んでしまい、他に見つかった同様の列石遺構についても「神籠石」と呼んで、それが学会に広がったのが誤称の始まりです。

高良山の列石遺構はもとより、高良山以外の列石遺構を「神籠石」と呼ぶのは、二重の意味で誤りがあります。高良山の列石遺構は「八葉の石畳」であり、「神籠石」ではありません。ましてや高良山以外の列石遺構の名称は、文献に見当たらず「神籠石」であろうはずはありません。

高良山の登山道にある巨大な磐座が本来の「神籠石」であり、そこには縁起に玉垂命が残したと記された「馬蹄石」があります。

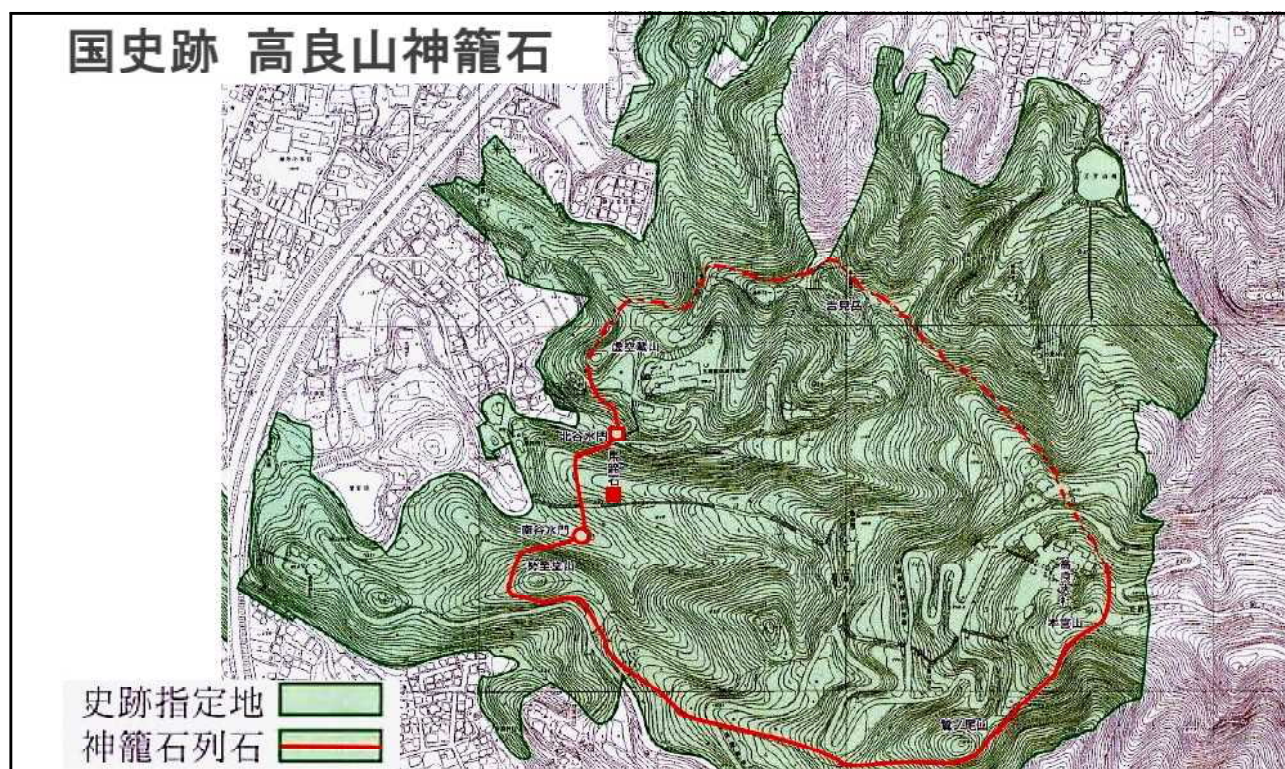


3 廃仏毀釈

高良山の列石遺構が「蓮華石」若しくは「神籠石」と呼ばれ、複数の名称が並存した時

慶応四年（1868年）に、明治政府は「神仏分離」政策を行い、久留米藩においても仏教の排除が行われました。高良山中にある将軍家霊廟の祭祀を廃止し、高良山座主に還俗と退寺を命じ、高良山の寺院や坊が取り壊され、高良玉垂宮は高良神社と改称することになりました。

高良山の国の史跡の指定の状況



現在、おつぼ山、女山、把木などの列石遺構を「神籠石」と通俗的に呼んでいます。

喜田貞吉は、列石遺構の列石のみでは防御の用を為さず、列石に加えて土塁や柵の存在が実証されなければならないとして山城説の矛盾を鋭く指摘しました。

ただ、土塁前面に並ぶ柱穴は、土塁の版築を造るための土留め用の堰板を支える柱の穴だとの説もあります。

いずれにしても、列石遺構をおしなべて同じ目的のものと考えてるのではなく個別に検討する必要があります。とりわけ、高良山の列石遺構は、たんなる防衛施設というには、疑問点があります。

まず、第一に、高良山にかかわらず、神籠石論争の最大の論点は列石の他に防御力を強化する施設があるかどうかとの論点ですが、土塁や土塁前面に並ぶ柱穴が防衛施設の根拠たり得るのかです。

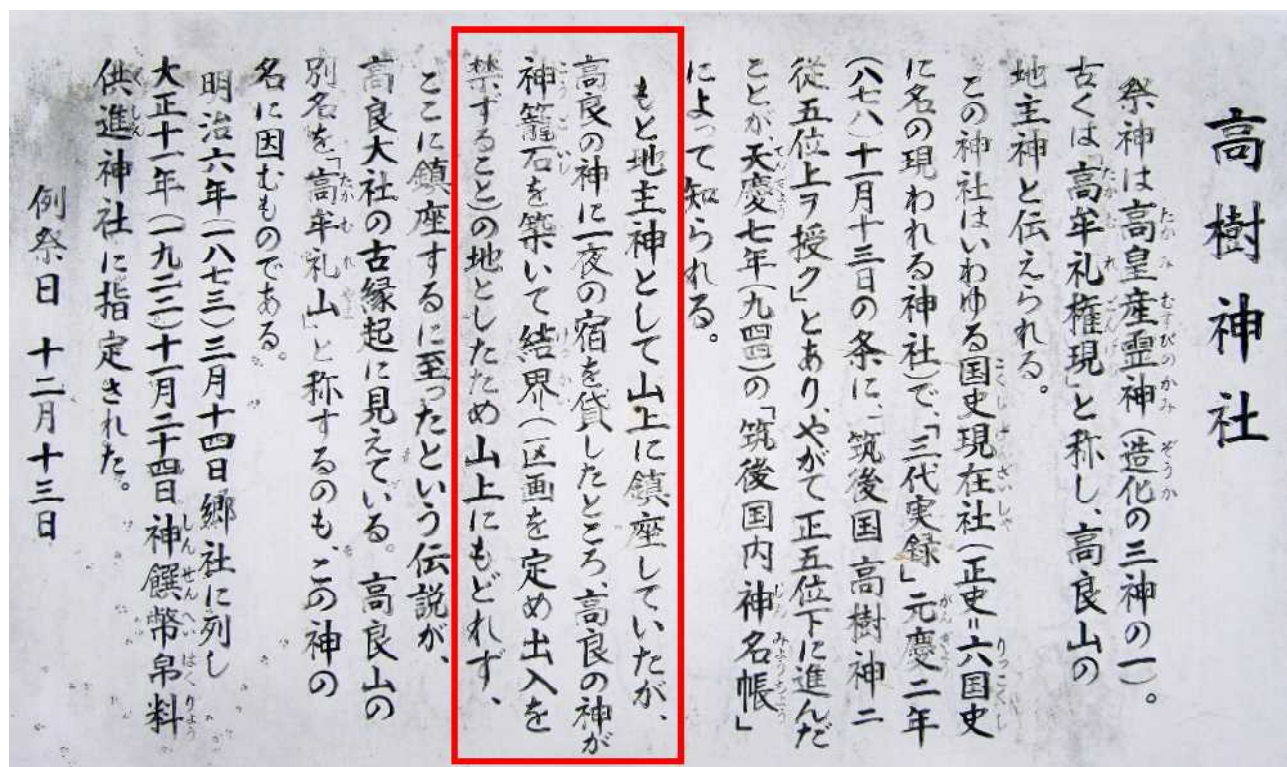
第二に、高良山の列石遺構では、柱の痕跡も一定の幅を持った土塁も見つかっていません。つまり高良山の列石遺構を山城跡とする根拠がありません。それでも山城跡と決めつけてよいのかです。

第三に、高良山の列石遺構は、朝鮮半島の山城や大野城と比べるとほとんどの列石が一段であり、1メートルにも満たないその高さでは防衛施設としての機能はあまりないように思われます。防衛するには、城郭のように立ちはだかり、すぐには外部から侵入できない構造である必要があります、城郭や城壁がある山城と同種の施設として判断するのはいかなるものでしょう。

5 高良山の列石遺構は結果

高良山に高良玉垂命が鎮座する前には、氏神の高木神が祀られており、その高木神は、高良山の麓の二の鳥居の手前にある高樹神社に鎮座しています。

この高樹神社の説明書きには、枠で囲って示したように、高良神が高木神を山上に出入りさせないために、神籠石（本来は「八葉の石畳」）で結界を作ったとされます。



つまり、この高樹神社の説明に従えば、高良山の列石遺構は、山城ではなく、高良玉垂命の結界と考えるべきでしょう。要するに列石遺構は磐座や神社とともにあるのです。

かつて「八葉の石畳」と呼ばれていた高良山の列石遺構は、古い神である高木神に取って代わった高良玉垂命が高木神を排除し、高良山に入らせないように造った結界（聖域を区切る境界）であると思います。高木神を祀る高樹神社は、次の平面図でも明らかなように列状遺構のすぐ外側に位置しています。



しかも、実は、高良山の山上（地図の右下）には奥宮があり、ここにも列石遺構が一部確認されています。

高良山の場合と同じように神社と共に列石遺構がある似た事例があります。

福岡県飯塚市にある鹿毛馬神籠石は、平地にありますが高良山のそれとよく似ており、石材には切石が使われ、それが一段で環状に連続しており、列石遺構内に牧野神社があります。霊域であるとか城郭であるなどの伝承はありませんが、防衛施設とは考えられない、ほぼ平地にあり、これも結界を示した可能性があるように思われる遺跡です。

このように、高良山と同様に列石遺構と神社が組み合わされた事例があり、防衛施設というよりも結界の可能性が高い施設と考えられます。

「神籠石」について、再度、結界とする目で見つめ直す必要があろうかと思います。

とりわけ、高良山には結界であるとの伝承があり、事実、列石遺構の外側に高木神を祀る高樹神社は追いやられていますので、これを重視すべきと考えます。

前回の例会の内容

■ 出雲神話と史実の狭間

一宮市 畑田寿一

出雲では、四隅突出墳丘墓の存在などヤマトに先駆けて単一種族の文化が形成され、精神面でも先進国であった。

■ 出雲と筑紫

名古屋市 石田泉城

壱岐を要に対馬海流圏は筑紫から出雲の海人の共通の勢力圏域であり、出雲と筑紫は大和に対して政治的な連合関係にあった。

■ 出雲王国の成り立ちと広がり

刈谷市 酒井 誠

出雲人は、そのDNAから大陸や半島からの渡来人ではないと考えられる。

銅鐸の中心地の移動からして出雲人は銅鐸と共に東へ移動・拡散し、大和も出雲人に占領されたと考える。銅鐸は三河、遠州へ広がるに連れて大きく豪華になっていくが3世紀初頭には九州勢により消滅する。

■ 稲荷山古墳出土鉄剣銘文の氏族について 東海市 大島秀雄

稲荷山古墳出土鉄剣銘文の氏族の名乗りからすると、銘文の者たちはヤマト王権と同盟し、後に支配下にあった武蔵を本貫とする膳臣の先祖の一族と考える。

例会の予定

■ 例会の予定

- 1 日時 7月18日(日)13時半～(第5集会室)
- 2 場所 名古屋市市政資料館
- 3 総会は延期します。

■ 来月以降の例会 8/15、9/19、10/17

会員の投稿について

■ 会報誌への投稿 (編集担当：石田)

furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日 7月28日(水)

会費の納入をありがとうございました。